20th CENTURY

20世紀の文学

世界文学全集

6

ヘンリー・ミラー

ネクサス

暗い春

読書の自由の擁護

集英社

NEXUS by Henry Miller
Copyright by Henry Miller 1965
Japanese Language anthology
rights arranged through
Agency Hoffman, Paris and
Charles E. Tuttle Company Inc.
Tokyo

BLACK SPLING by Henry Miller
Copyright by Henry Miller 1965
Japanese Language anthology
rights arranged through
Agency Hoffman, Paris and
Charles E. Tuttle Company Inc.
Tokyo

DEFENSE OF THE FREEDOM
TO READ by Henry Miller
Copyright by Henry Miller 1965
Japanese Language anthology
rights arranged through
Charles E. Tuttle Company Inc.
Tokyo

© 1965 Shueisha

世界文学全集
6
ヘンリー・ミラー

昭和四十年一月二十二日　印刷
昭和四十年二月二十二日　発行

訳者　吉田健一・河野一郎
発行者　陶山巌
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　文勇堂製本工業
本文用紙　日本パルプ工業株式会社
クロース　東洋クロス工業株式会社
発行所　株式会社集英社
定価　五二〇円

目次

ネクサス　河野一郎訳　三

暗い春　吉田健一訳　三三一

第十四地区　三三三

春の三日目か四日目　三四三

土曜の午後　三五三

わたしには天使のすかしが入っている　三六六

ジャバウォール・クロンスタット　三八〇

夜の世界へ……　三九三

仕立屋　四一五

支那を漫歩する　四五〇

バーレスク　四六九

誇大都市妄想患者　四八一

読書の自由の擁護　河野一郎訳　四八六

二十世紀の放浪者ヘンリー・ミラー　吉田　健一　四九五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ネクサス

河野一郎訳

序

見ればどうだ、セリファンはもうだいぶ前から目を閉じ、半ば居眠りをしながら馬車を走らせていたのだ。ほんのときたま思いだしたように、これまた夢うつつの馬たちの横腹へ手綱を打ちつけるだけだ。ペトルーシカはペトルーシカで、すでに帽子はとうの昔にどこかへ飛ばしてしまい、うしろへのけぞりチチコフの膝にもたれきりというていらくで、チチコフにコツンと一突き拳固をくらわされねばならなかった。いくらか正気づいたセリファンが斑馬の背に三つ四つ鞭をくれたため、馬は犬小走りに駈けだした。彼はぜんぶの馬たちの上でも鞭をふるい、甲高い歌うような声で叫んだ――「びくつくこたあねえ！」馬どもはふるいたち、この半蓋馬車をいともの軽々と曳いてつっ走った。セリファンはただ鞭をふりまわし、「はいどう！　はいどう！」とけしかけるのみで、わずかにくだり坂になった街道に点在する丘をトロイカが飛ぶように駈けあがり、駈けおりるにつれ、馭者台の上で軽やかに身をゆすっていた。チチコフは革クッションの上で軽く揺られながら、にこやかな微笑をつづけていた――彼もまた思いきり馬を飛ばすのが好きだったのだ。いったいロシア人で、疾駆を好まぬ者があろうか？　飛びまわり、浮かれさわぎ、何かといえば「ちきしょう糞ったれ！」と毒づきたがるロシア人気質に、どうしてこれが好かれずにいられよう？　何かしら魅惑的なすばらしさの感じられるものを、どうして好まずにいられよう？　あたかも目に見えぬ力にとらえられ、その翼にのせられたかのように、自分が飛べばすべても飛ぶ――里程標も飛べば、幌馬車の馭車台にすわった商人も向こうから飛びきたり、飛び去る。鬱蒼たる樅や松の林も、斧の響きや鴉の鳴き声もろとも、街道の両側に飛びすぎる。街道ぜんたいが、いずことも知れぬ果てしないかなたへと飛んでゆく。目にもとまらぬ速さのため、それぞれの姿もさだかならぬこの目くるめくばかりの飛翔のなかには、何かしら怖ろしいものが隠されている。動かぬように見えるものは、ただ頭上の空と、軽やかな雲と、その雲間から洩れる月ばかりだ。おお、おまえトロイカよ、小鳥のごときトロイカよ！　だれがおまえを作りだしたのか？　おまえは血気にはやる国民の間にのみ――中途はんぱなことを好まず、広大なること世界の半ばにまたがり、里程標を数えるだけで目もくらむばかりの土地にのみ――生まれ出る運命なのだ。しかも、おまえの曳く馬車はけっして出来のいい代物ではない――鉄ネジ

などでとめた上等なものではなく、ヤロスラーヴリあたりの小器用な百姓が、斧とのみとでトンカン手っとりばやくよせ集めたにすぎない。おまえの馭者は、しゃれたドイツ製の長靴などははかず、顎ひげをのばし大きな手袋をはめ、何やら得体の知れぬ物の上へすわりこんでいる。だがひとたびこの男が腰をあげ、鞭を振りあげ、長い唄を歌いはじめるや――馬はつむじ風のように駈けだし、車輪の輻は円板と変わり、街道はふるえ、徒歩の通行人がたまげて立ち止まり、驚きの叫びをあげるのを尻目に、トロイカは天駈け、飛び去ってゆく……。そしてあとは早くも、はるかかなたに何かしら埃を巻きあげ、宙を切って飛びゆくものが見えるばかりだ。

ああロシアよ、おまえもまた、あのけっして追いつくことのできぬ血気にはやるトロイカのように、飛びゆくのではないか？　おまえの足の下に道は煙をあげ、橋はとどろき、万物ことごとくがうしろへと取り残されてゆく！　おまえの疾走を目のあたり見た者は、この神わざの不思議に茫然として立ちすくむ――これは天よりの稲妻ではあるまいか？　恐怖をかきたてるこの奔流は、そも何を意味するのか？　そもいかなる未知の力が、世に知られぬこの馬たちに秘められているのか？　ああ馬よ馬よ、なんという馬たちだ！　おまえのたてがみには嵐が宿っているのか？　おまえの全身には、炎のような鋭敏な耳が隠されているのか？　天上からの聞きなれた歌声を耳にすると、おまえはたちまちいっせいに赤銅の胸を張り、ほとんど蹄も大地に触れさせず、宙を切る直線と姿を変え、神の霊感を受けて突き進む！……ああロシアよ、おまえはどこへ飛びゆこうというのか？　答えてくれ！　だがロシアは答えない。鈴の音は妙なる響きを伝え、ちぎれちぎれに引き裂かれた空気は、轟々ととどろき風に変わる。地上のあらゆるものが飛び去る。そして他のすべての国民や国家は、それを横目で見やりながら脇によけ、道を譲るのだ。

ゴーゴリ「死せる魂」より

一

ウッフ！　ウッフ、ウッフ！　うっふ！　うっふ！

真夜中に吼える。吼える、吼えつづける。ぼくは金切り声をあげる、だがだれも答えてはくれない。悲鳴をあげる、だが舒すら返ってこない。

「おまえの望みは――クセルケスの東か、キリストの東か？」

ただひとり――脳湿疹をわずらって。

やっとひとりになれた。なんとすばらしいことだ！　ただぼくの期待していた孤独とは違うが。神とふたりきりになれたらと思うのだ！

うっふ！　うっふ、うっふ！

目を閉じ、あの女のすがたを呼び起こしてみる。それは現われる、暗闇のなかに浮かび、波しぶきの中から仮面は現われる――弓なりにそった女優ティラ・デュリュウの唇、そろった白い歯並び、マスカラに黒ずんだ目、ねっとりと青く光る目蓋、黒檀のように黒く放埒に波打つ髪。カルパチア山脈から、ウィーンの屋根から生まれた女優。ブルックリンの平地から、ヴィーナスのように現われた女。

ウッフ！　ウッフ、ウッフ！　うっふ！　うっふ！

ぼくは叫ぶ、だがどうしたことだ、その叫びはささやきのようにしか響かない。

ぼくの名はアイザック・ダスト。ぼくはダンテの第五天国にいる。狂乱のストリンドベリィのように、ぼくはくり返す――「それがなんだというのだ？　おのれが唯一絶対の存在であろうと、対抗者を持とうと、それがなんだというのだ？」

どうしてこんな異様な名前が、急に甦ってくるのだろう？　いずれも懐しい母校の同級生ばかりだが――モートン・シュネイディッグ、ウィリアム・マーヴィン、イズラエル・シーゲル、バーナード・ピストナー、ルーイ・シュナイダー、クレアレンス・ドナヒュー、ウィリアム・オヴァレンド、ジョン・カーツ、パット・マッカフリー、ウィリアム・コーブ、アーサー・コンヴィサー、サリー・ライボウィッツ、フランシス・グランティ……。だれひとり頭をもたげた者はない。台帳から抹殺されてしまったのだ。毒蛇のように生殺しにされたのだ。

オオイ、イルノカ、同志タチ？

答えはない。

オーギュスト、きみなのか、暗闇のなかに頭をもたげたのは？　そうだ、ストリンドベリィだ、二本の角を生やしたストリンドベリィ。偉大なる寝取られ男め。

幸せだったいつかの日――いつだったか？　どれだけ遠ざかってしまったか？　どの遊星での話だったか？――ぼくは壁から壁へと歩きまわり、あの友この友と懐しい友人たちに挨拶をしたものだ、レオン・バークスト、ウィッスラー、ロ

ヴィス・コーリント、大ブリューゲル、ボッティチェリ、ボッシュ、ジョット、チマブエ、ピエロ・デラ・フランチェスカ、グリューネヴァルト、ホルバイン、ルーカス・クラナッハ、ファン・ゴッホ、ユトリロ、ゴーギャン、ピラネッシ、歌麿、北斎、広重――そして「悲しみの壁」。ゴヤもあった、ターナーも。そのいずれもが、貴い何かを分かち与えてくれた。だがとりわけティラ・デュリュウは――ばらの花びらのように真紅の、雄弁な官能的な唇を持った女は。

いま壁に絵はない。かりにびっしりと名画がかかっていたにしても、ぼくには何ひとつ見分けがつくまい。暗闇がしのびこんできた。バルザックのように、ぼくは仮空の絵画を飾って暮らしている。額縁までも仮空のものだ。

塵より生まれ塵に帰るもの、アイザック・ダスト、ダストよりダストに。古いよしみに免じて、遺言補足書をつけ加えるがいい。

通称ヘゴロボル、ターホウ・チチカカ湖専制君主宮廷のバーサ・フィリグリーことアナスターシャは、いま一時的に看視病棟にはいっている。自分からはいったのだ、精神状態の正常か否かを調べてもらうべく。ソールは自分をアイザック・ダストと思いこみ、譫妄状態で吼える。ぼくたちは雪に閉じこめられ、流し台とツインベッドをそなえた玄関上の寝室にこもったきりだ。稲妻が間をおいて光る。かわいいあやつり人形のブルーガ伯爵は、ジャヴァやチベットの偶像神にかこまれ、たんすの上でやすらっている。彼は胸骨の酒盃を飲み干しながら、狂人の薄笑いを浮かべている。紫色の糸で作られたかつらの上には、ラ・ガレリ・デュファイエルから取り寄せたボヘミアふうのおもちゃの帽子がのっている。その背は、スターシャ（アナスターシャの愛称）が精神病院へ出かける前に預けていった何冊かのりっぱな本にもたれかかっている。左から右へ順にひろうと――

『宮廷の酒宴』、『ヴァチカンの詐欺』、『地獄の季節』、『ヴェニスに死す』、『破門』、『現代の英雄』、『生の悲劇的感情について』、『悪魔の辞典』、『十一月の枝』、『快楽主義を超えて』、『女の平和』、『快楽主義者マリウス』、『黄金の驢馬』、『薄命のジュード』、『謎の男』、『ピーター・ウィッフル』、『小さな花』、『若き人々のために』、『マブ女王』、『偉大なる神パン』、『マルコ・ポーロの旅行』、『ビリチスの歌』、『キリストの知られざる一生』、『トリストラム・シャンディ』、『黄金の壺』、『黒いブリオニア』、『根と花』。

欠けているのはただ一冊――ラザーノフの『性心理学』だけだ。

スターシャ自身の筆蹟で、どうやらこの中の本のどれかから抜いたらしい文句が（肉屋の包み紙の切れはしに）書いてある――「かの奇妙な思想家、ロシア人中のロシア人N・フ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

エデーロフは、独自の反国家的アナキズム形態を発見するであろう」

もしこれをクロンスキーに見せれば、彼はすぐさま精神病院へ駆けこみ、これを証拠としてさし出すだろう。なんの証拠か？　アナスターシャが正気であるという証拠だ。

きのうだったろうか、あれは？　そうだ、きのうの朝四時ごろだった、モーナを捜しに地下鉄の駅のほうへ歩いていたときだ、吹き寄せられつもる雪の中をそぞろ歩いていたのは、モーナと彼女のレスラーの友人ジム・ドリスコルではないか。ふたりのようすを見れば、金色に輝く牧場ですみれでも捜しているかと思えただろう。雪も氷も意にかけず、川から吹きつける極地の寒風にもかまわず、神も怖れず人もなく。ただそぞろ歩いているのだ、笑い、語り、鼻歌を歌いながら。野ひばりのように自由に。

聞けよ、聞け、天の門にひばりの歌うを！

ぼくはふたりのあとをずっとつけていった、ふたりの無頓着さにぼくまでが感染したように。とつぜんぼくはオジエツキーのアパートのあるほうへ、斜めに道を左へ折れた。オジエツキーの「間借り部屋」、というべきか。たしかに明かりはつき、ピアノがかすかにドナーニ（現代ハンガリーの作曲家）の抜粋曲を奏でていた。

「よォやってるな、かわいい虱どもめ」と思っただけで通りすぎた。ゴウェイナス運河の方では霧がたちかけている。氷山でも溶けているのだろう。

家へ帰ってみると、モーナは顔にクリームをぬりたくっていた。

「いったい、どこへいってらしたの？」と非難がましく問いつめてくる。

「ずっと前に帰ったのかい？」とぼくはやり返す。

「何時間も前よ」

「おかしいな。ぼくはほんの二十分ほど前にここを出たつもりなんだが。ひょっとすると、寝ぼけて歩きまわってたのかもしれん。しかし妙だな、きみとジム・ドリスコルが腕を組んで歩いてるのを見たような気がしたんだが……」

「病気じゃないの、ヴァル？」

「いいや、ちょっと酔ってるだけだ。つまり……幻を見ただけさ」

モーナは冷たい手をぼくの額にあてがい、脈をとる。何も異常はないようだ。モーナは当惑を覚える。どうしてそんな嘘をでっちあげるの？　あたしを苦しめるため？　スターシャは精神病院だし、それに家賃だってたまっているし、心配事はもうじゅうぶんじゃなくて？　もっとよく考えてちょうだいよ。

ぼくは目覚し時計のところへ歩み寄り、針を指す。六時だ。

「わかってるわよ」とモーナ。
「じゃ、二、三分前に見かけたのはきみじゃなかったんだな？」
モーナはぼくを、気でも狂いかけているのではないかと言いたげに見つめる。
「何も心配はいらないよ。一晩じゅうシャンペンを飲んでたからな。ぼくの見たのはきみじゃなかったんだ――きみの星気体だったんだろう」間をおく。「ともかく、スターシャは大丈夫だ。病院のインターンとよく話し合ったんだが……」
「あなたが……？」
「うん、手持ちぶさただったもんで、行ってようすを見てきてやろうと思ったんだ。おみやげにプディングを持ってってやったよ」
「おやすみなさいな、ヴァル、疲れてらっしゃるわ」間。「どうしてこんな遅くなったか知りたければ教えたげるわ。たったいまスターシャと別れたばかりなの。三時間ほど前に病院から出してやったの」モーナは忍び笑いを始めた――それともほくそ笑みだったろうか？　「あしたすっかり話すわ。話せば長くなるから」
ぼくはこう答えてモーナを驚かせてやった――「その必要はないよ、その話ならちょっと前にすっかり聞いたから」
ぼくたちは明かりを消し、ベッドにもぐりこんだ。モーナの忍び笑いが聞こえる。
お休みの挨拶がわりに、ぼくは小声でささやいた――「チチカカ湖のバーサ・フィリグリーか」
シュペングラー（ドイツの哲学者）やエリー・フォール（フランスの芸術批評家）をひとしきり読んだあと、ぼくはよく服を着たままベッドに倒れこみ、古代文化に思いをはせるかわりに、迷路のような虚構の世界を手さぐりで歩んでいる自分に気づくのだ。シュペングラーもフォールも、真理を伝えてくれるとは思えない――便所にゆくというような簡単なことについてさえ。根が誠実なスターシャは、モーナを喜ばすため、モーナと同じ習慣を身につけてしまった。ロマノフ家の落胤だという彼女の空想物語にも、一沫の真実味があった。スターシャの場合はモーナと違って、真赤な嘘という気がしないのだ。そればかりではない、事実をつきつけてくる者があったとしても、スターシャは腹立ちをぶちまけたり、大仰な身ぶりで部屋から出ていってしまったりはしなかった。そうなのだ、スターシャはただにっこりと大きく顔を崩し、やがてそれが天使のようなやさしい微笑に変わるのだ。このスターシャとなら気が合いそうに思えるときがある。だがその時がようやく熟したと思うと、仔をかばう親獣のように、モーナは彼女をつれ去ってしまうのだ。
われわれのざっくばらんな会話中のひときわ奇妙な空白は――ときどきぼくたちは、一見固くるしい話し合いを延々と

やらかすのだが――いうなれば、説明のつかぬ間隙とでもいおうか、それは幼い時分にまつわる部分だった。彼女たちがどこで、だれと、どうやって遊んだのかは、まったくの謎のままなのだ。どうやらふたりは、揺りかごから一足飛びに一人前の女になってしまったらしい。幼な友だちのことや、どんな楽しいふざけごっこをやったかなど、一度も聞いたことはないし、好きだった街の通りや、遊んだ公園や、楽しんだ遊戯の話も出ないのだ。ぼくはあからさまに訊いてみた――「スケートはできるかい？　泳ぎは？　玉ころがしは？」そうよ、そんなのだけでなく、もっとほかのもできるわ。あたりまえよ。だがふたりは、けっして過去へ溯ることをさせない。話のはずんだ折などに、ふと子供時分の不思議なすばらしい経験を思いだすこともない。時たまどちらかが、むかし腕を折ったことがあるとか、くるぶしをくじいたとか言いだすことはある、だが、いつのことなのだ？　どこのことなのだ？　何度も何度もくり返し、馬を厩へ曳いてでもゆくように、ぼくはやさしく、なだめつすかしつ、ふたりを過去へ引きつれてゆこうとする、だがだめなのだ。細かな事実はふたりを退屈させる。いつどこで起こったことだろうが、かまわないじゃないの。よろしい、それではまわれ右としよう！　ぼくはわずかな共鳴の色でも見いだせないかと、話題をロシアかルーマニアに切り換える。それも、最初はタスマニアかパタゴニアあたりから始め、徐々にからめ手から話をうまくロシアへ、ルーマニアへ、ウィーンへ、そしてブルックリンの二次元空間へと持ってゆくのだ。ふたりは、こちらの策略にはまるで疑いを抱かぬように、いきなりロシアやルーマニアもふくめ、見知らぬ土地の話を始める――だが、まるで見知らぬ男から聞いたか、旅行案内で読みかじってきたような話しぶりだ。モーナよりもちょっとばかり策に長けたスターシャは、ぼくに話題のきっかけを与えるようなふりさえする。たとえば、ドストエフスキーに出てくるこれこれの事件といって、でまかせを聞かせるようなことを考えつくのだ。ぼくの記憶が鈍いか、かりに良い記憶力を持っていたにせよ、とてもドストエフスキーの尨大な作品にひしめいている何千もの出来事を覚えていられるはずはない、とたかをくくっているのだ。はたして本物のドストエフスキーを持ちだしていないとは、どうして言いきれよう？　だがぼくには、いったん読んだものの雰囲気は忘れないというすばらしい記憶力がそなわっている。にせのドストエフスキーを嗅ぎつけないほうがどうかしているというものだ。しかし、彼女を誘いだすため、ぼくはそのエピソードを思いだしたようなふりをする。同意するようにうなずき、笑い、手を叩き、なんでもやってやるが、嘘と知っていることだけは気づかせない。だがたまには、同じ冗談めいた調子で、彼女がもっともらしくごまかした些細な個所や、でっちあげたこじつけなどをつついてやるのだ。もし相手が、忠実にエピソードを物語ったようなふり

を見せると、くどくど抗弁さえしてやる。そしてその間じゅう、モーナは嘘にも事実にも気づかず、小鳥のようにしあわせなようすで熱心に耳を傾けすわっている――ぼくたちの話し合っているのは、モーナの偶像であり、神であるドストエフスキーだからだ。

なすこともなく、さし迫った問題もないとき、なんと魅力的な、なんと心楽しいものになることだろう、この嘘と偽造の世界は。すばらしいではないか、陽気なとてつもない嘘つきのわれわれは？　「ドストエフスキーさんがいまここにいないなんて残念ね！」とモーナはときどき言いだす。まるであの狂った人間たちを、どの作品にも満ちみちた気狂いじみた場面を、みな彼が発明したかのように。つまり、ドストエフスキーは自らのなぐさみにそれらを発明したというのだ、でなければ彼が生まれながらのばかで千三つ屋だったからか――。女どもの頭に浮かぶことはまるでないのだ、彼女たちこそ人生が目に見えぬインキで書きつづっている本の中の、狂った登場人物だということは。

したがって、男女を問わず、モーナの崇拝する人間がほとんどきまって「気ちがい」なのも、毛嫌いする人間がきまって「ばか」なのも、不思議ではない。だが、ぼくにお世辞のひとつもいってくれる気持ちになるとき、モーナはきまってぼくを「ばか」呼ばわりだ――「あなたって、ほんとにかわいいおばかさんね、ヴァル」つまり、すくなくともモーナの評価においては、ぼくはじゅうぶんドストエフスキーの世界に属するに価する偉大な、複雑な人間だということだ。時には、ぼくの未だ書かれざる作品を褒めちぎるときなど、あなたはドストエフスキーの再来だなどと言いだす。時おりてんかんの発作でも見せてやれないのが残念なくらいだ。そうすれば、文句のないドストエフスキーができあがるのだが。だが不幸にして、ぼくはあまりにも早く「ブルジョワ」にと堕落し、幻は消え去る。つまり、ぼくはあまりに詮索好きに、けちに、狭量になりすぎるのだ。モーナにいわせると、ドストエフスキーは「もろもろの事実」にはけっして興味を示したことはないという。（例によって、時にはぎょっとさせられるまことしやかなでたらめだ。）だがモーナの言葉を信ずるならば、ドストエフスキーは常に世事に超然とかまえていたか――さもなくば深みに埋没していたそうだ。けっして表面に泳ぎ出てくるような真似はしなかった。手袋やマフや外套などには目もくれなかった。名や住所を知るため、女のハンドバッグをのぞきこむようなこともしなかった。ただひたすら、想像の世界にのみ生きていたというのだ。

一方スターシャも、彼の生き方、創作方法などについて、独自のドストエフスキー観を持っていた。奇行の持ち主ながら、結局スターシャのほうがいくらかでも事実に近かったといえよう。あやつり人形がただの「想像」ではなく、木や張り子の材料でできていることを知っていたからだ。ドストエフ

スキーもまた「ブルジョワ」的一面を持っていなかったとは、スターシャには言いきれなかったのだ。彼女がドストエフスキーの作品でもっとも好んだのは、その悪魔的要素だった。スターシャにとって、悪魔は現実であった。悪は現実であった。だがモーナは、ドストエフスキーの悪には影響を受けないようにみえた。モーナにとっては、悪もまた彼の「想像」の一要素にしかすぎなかったのだ。本に書かれているようなことで驚く女ではなかった。人生のほとんどどんなものにも——といってもよかろう。それだからこそ、火の中でも平然と歩けたのだ。だがスターシャは、いったん不安な気分に見舞われると、朝食をとることさえ耐えがたい苦痛となった。スターシャには悪を嗅ぎわける嗅覚があり、冷たい朝食のコーン・フレークスの中にさえ、その存在を嗅ぎつけた。スターシャにとっては、悪魔は常に犠牲を待ち受けている遍在の絶対者であった。魔力をのぞくため護符を身につけ、見知らぬ家へ入るときには清めの身振りをしたり、耳なれぬ言葉で呪文を何度も唱えたりした。だがモーナは、これほど原始的な、これほどまで迷信的なスターシャを「かわいい」と考え、すべてに寛大な微笑を見せた。「あの子に流れているスラブの血のせいよ」と言い言いしたものだ。

さて、病院当局がスターシャをモーナの手にまかしたとなると、われわれとしても事態を明確に見きわめ、このむずかしい女のために、もっと確実な、もっと落ち着いた生活を用意してやらねばならなくなった。モーナが涙ながらに語ったところによれば、スターシャをつれ出してくるのは病院側でうんといわず、容易なことではなかったという。この友人について——自分についてはむろん——どれほど弁じたてたかは、とても話して聞かせられるものではないという。何週間もかけ、巧みな誘導の結果やっとのことで、ぼくは担当医との会見の模様のはめ絵を組みあげることに成功した。もしぼくに予備知識でもなければ、さしずめ彼女たちはふたりとも精神病院の患者に見えたにちがいない。さいわい、ぼくは別な側からの資料を持っていた——思いがけず、余人ならぬクロンスキーから訊いていたのだ。なぜ彼がこの問題に興味を持ったのか、ぼくは知らない。おそらくはモーナが、彼の名を病院側に教えたのだろう——かかりつけの医者として、いずれは真夜中に彼を電話口に呼びだし、おろおろ声で、最愛の友人のためになんとか力になってくれと泣きついたにちがいない。ともかくモーナは、スターシャの釈放を取りきめてきたのがクロンスキーであり、スターシャはだれの保護にもなっておらず、クロンスキーがひとこと（病院側に）話せば大変なことになるだろうということを、ぼくには話さなかった。もっとも、この大変なことになるだろうというのははったりだった。こちらも真に受けはしなかった。おそらくほんとうのところは、病室が満員であふれそうだったのだ。ぼく

の頭の隅には、いつかそのうち自分で病院を訪ね、正確ないきさつを調べだしてこようという決意があった。（記録のためにだ。）いそぐことはなかった。ただぼくには、いまのこの状態が、やがてきたるべき事態の序曲、ないしは前兆にすぎないような気がした。

ぼくは気分まかせに、グリニッチ・ヴィレッジへ出かけるようになった。まるで野良犬のように、そこいらじゅうをうろつきまわった。街灯の柱のところまでくると、うしろ足をあげて小便をひっかけた。ウッフ、ウッフ！　うっふ！

こうしてぼくはよく酒場「鉄の大鍋（アイアン・ゴールドロン）」の外に立ち、黒ずんだ雪が膝までつもった薄汚い芝生を囲っている柵によりかかり、客の出入りを眺めたものだ。一番窓ぎわのテーブル二つが、モーナの持ち番だった。ぼくはモーナがいつも煙草を口にくわえ、顔じゅうをにこやかな微笑にして客に挨拶し、注文を受け、ほの明るい蠟燭の光の中をいったりきたりしながら、食べ物を手わたしているのを眺めた。時たまスターシャが、きまって背を窓の方に向け、テーブルに両肘をつき、顎をかかえて、そのテーブルに席をとることがあった。たいてい最後の客が出ていったあとまで、そこにすわっているのだ。そしてモーナが加わる。モーナの顔つきから察して、よほどおもしろい会話がいつも交わされているらしい。時にはあまりやたらに笑いすぎ、二つ折れになることもある。もしそんな気分のとき、気に入りの客のだれかが加わろうとすると、男であろうと女であろうと、まるで蠅のように追い払われてしまうのだ。

いったいあのふたりは、何がそれほどおもしろかったのだろう？　何がそんなにおかしかったのか？　答えてくれ、すればぼくはロシアの歴史でもたちどころに書いてみせよう。

ふたりが腰をあげそうな気配を察すると、ぼくはすぐさまその場を逃げだす。ゆっくりと物思いに沈みながら、ぼくはぶらついてゆく。安料理屋の一つ一つに首をつっこみながら、やがてシェリダン広場へやってくる。広場の一角には、いつも古風な酒場ふうに明かりのついた、ミニー・ドゥシェバッグの店がある。連中が最後にここへやってくることはわかっていた。ぼくはただ、ふたりが無事に席をとるのをたしかめたかっただけなのだ。柱時計をちらと見やり――あと二、三時間もすれば、すくなくともどちらかはねぐらへもどってくるだろうと見当をつける。ふたりのほうを最後にちらと眺めやり、すでにふたりが暖かい注目の中心になっているのを見ることは慰めになった。慰め――なんという言葉だろう！――だったのだ、あのふたりが、彼女たちをほんとうによく理解し、いつでもいそいそと力になってくれる連中にかばってもらえるだろうと思うことは。また地下鉄に乗りこんでから、あのふたりの服装をほんのちょっぴり変えれば、たとえベルティヨン式人体測定器の権威でも、どちらが男でどちらが女かを見分けるのに戸惑うだろうと考えるとおかしかった。男

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com